

生命の尊重と個人の尊厳を旨とし、和をもって市民に信頼される保険・医療・福祉サービスを提供します。

◆ 2025年新春号 ◆
本年もよろしくお願いいたします。



ユマニチュードに取り組むコメディカルのスタッフ

ユマニチュードとは、「自由平等・博愛・優しさ」を伝え合うケアの技術。郡山市医療介護病院では10年前から組織としてユマニチュードに取り組んできました*。ユマニチュードを実践している職員の声を紹介します。

当院では、ユマニチュードの組織的な取り組みとして、すべての職員がユマニチュードについて学ぶ機会を設けています。入職時の基本研修をはじめ、ステップアップのための研修も定期的に行なっています。

ユマニチュードの取り組みの中心となるのは日本ユマニチュード学会の認定インストラクター。当院では介護福祉士の2人のスタッフが、数年前にインストラクターの資格を取得し、ユマニチュードを実践するけん引役となってきました。

*これまでの取り組みが評価され、当院は昨年2024年に「ユマニチュード認証プログラム」を取得しました。認証までの歩みについては、37号をご覧ください。

「優しさを伝える」とは、ケアの現場で、「優しさを伝える技術」があると知って感動したという声を聞くことがあります。当院のインストラクターの一人は、ユマニチュードを学び実践するなかで、「『としてあげる』」「『優しい介護』ではないということを知ったと言います。

「してあげる」のではなく、その人の意思を尊重すること。ユマニチュードの技法の根底には、このような哲学があるのです。

特集

ユマニチュードの取り組み

【MESSAGE】



郡山市医療介護病院
院長
原 寿夫

認知症の方の意思が尊重される社会に

認知症基本法が施行され、間もなく1年になります。この法律の正式名称は、「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」で、共生社会の実現が目的です。認知症の方も、だれもが共に生きる社会の実現を目指すのですが、その前提として、ご本人の思いや考えを大切にすること、その意志決定を支援することがとても大切です。一人ひとりの、残りの人生を、その人らしく過ごして頂くために、意思決定支援はとても大切です。

しかし、一人暮らしの方が増えるなか、意思決定支援をするには、個々に様々な課題のあることが少なくありません。そこで、成年後見制度が設けられています。弁護士さんや司法書士、社会福祉士の方あるいは親族の方が家庭裁判所から成年後見人として選任され、ご本人の意思決定を支援します。また、社会福祉協議会等が法人後見として対応している例も増えてきているようですが、まだまだ足りていないのが現状です。よって、一般市民の方にも「市民後見人」として活躍して頂きたく、その養成研修が始まるようです。ぜひ多くの方に養成研修を受けて頂き、市民後見人としてご活躍頂きたく思います。

そのためには、認知症についてご理解頂くことが必要です。日本ユマニチュード学会からブロンズの認証を受けた当院が以前から行っている、「オレンジカフェ」や「認知症サポーター養成講座」「家族介護教室」等で、優しさを伝えるケア技術に触れ、認知症について学んで下さい。

【INFORMATION】

ご案内

こおりやまオレンジカフェ atビッグハート

物忘れや認知症が気になる「ご本人・ご家族・関係者のみなさん」と、日ごろの悩みや工夫されていることなどを気軽に話せる集いの場です。

- 日時 1月22日(水)／2月26日(水)／3月26日(水)
- 場所 ビッグハート(郡山医療介護病院 1階玄関ホール)
- 時間 14:30～15:30 ●参加費 200円(おみやげ付)
- 【事前申し込み】連絡先 024-935-0527(郡山医療介護病院 地域連携室)

認知症サポーター養成講座

郡山市では、認知症の人や家族を支援する「認知症サポーター」を養成しています。当院が会場となっている講座の日時をご案内します。

- 日時 1月16日(木)／3月13日(木)
- 対象 郡山市民の方または市内に勤務されている方
- 内容 認知症について、認知症の方との接し方など
- 会場 ビッグハート(郡山医療介護病院)
- 時間 14:00～15:30 ●参加費 無料 ●定員 50名
- 【事前申し込み】連絡先 024-924-3561(郡山市地域包括ケア推進課)

着任医師紹介



鉄地川原 正顕(てちかわらまさあき)先生
循環器内科専門医
昨年9月より着任いたしました。皆様の気持ちに寄り添う医療を行ってまいりますのでよろしくお願いいたします。

施設紹介

地域連携室 安心してケアを受けられる情報を提供

地域連携室は、「相談窓口・地域連携室」と「郡山市在宅医療・介護連携支援センター」の二つの部署で構成されています。相談窓口・地域連携室は、入院・入所をはじめとする総合的な相談業務を担当しています。最も多いのは医療機関からの問い合わせですが、ケアマネジャーや時にはご家族の相談に対応することも。「いわば外部と病院の橋渡し役。ニーズを把握して、どうつなげていくか、常に考えながら対応しています」

郡山市在宅医療・介護連携支援センターは郡山市からの委託事業で、医療・介護関係者の連携を推進するための相

談窓口として開設されました。「郡山は機関・施設数が多いので、積極的なアウトリーチで顔の見える関係づくりをしていきたい」とスタッフ。「そして行政への働きかけ、地域へのフィードバックができるセンターを目指していきたいです」

地域連携室 024-935-0527



地域連携室のスタッフ

編集後記

明けましておめでとうございます。ビッグハートプレス新年号をお届けしました。新年に当たり皆さんはどんな目標を立てましたか。私も目標に向かってチャレンジしていきたいと思います。今号では、認知症の介護を経験された方に体験を発表していただいた市民公開講座も特集しました。発表者それぞれの思いが皆さんの胸に強く響いて感動しました。

【事務部長 伊藤克彦】



特集

ユマニチュードの取り組み 〜ステップアップ研修〜

ユマニチュードの「哲学」+「技術」について、ステップアップ研修の内容をもとにご紹介します。(ステップアップ研修は全職員を対象に、数回に分けて実施しています) 講師は、ユマニチュードインストラクターで調布東山病院ユマニチュード推進室科長の安藤夏子さん。ご自身の体験などをもとに、ユマニチュードについてわかりやすくお話してくださいました。

ケアのメンソッドとして

安藤さんは「現場で、だれでも優しくしたいと思ってる、けれどできないから苦しむ」と自身の看護師としての体験を重ねて話を始めました。ユマニチュードに出会い実践をするようになって、「自分の中からとげとげしさがなくなっていくんです。それでユマニチュードは、患者さんだけでなく、ケアする人も楽になるかもしれないと思うようになりました」ユマニチュードは「哲学」+「技術」と、安藤さんは説明しま

ユマニチュードは目的ではなく手段

では、認知症など反応のない方に、この4つの柱をどのように実践していくか。「本人が持てる力を決して奪わない」を前提に、具体例や動画を紹介しながらの説明は、一つひとつ納得できるものがありました。一通り講義が終わってから、参加者が二人一組になりロールプレイを行いました。ひとことで「見る」といっても、実際にやってみると目線を合わせることに技術と工夫がいることがわかります。

安藤さんは、「ユマニチュードは、目的ではなく手段です」と何度も強調されました。「ユマニチュードを使っていかにいケアを行なっていくか、プロとして誇りをもって実践していくてほしい」と結びました。

研修に参加した職員の声

目線や位置関係、ケアの準備など、まだまだ上手にできず、自分でも失敗しているのに気づくことが多いので、注意し努力していきたい。

【介護福祉士】

見る・話す・触れるを再認識したため、距離感に気を付けながら利用者に接していこうと思います。

【OT】

対応するときに、トーンを上げずに落ち着いて話す、相手をつかまず下からそっと触れる、本人ができることは、本人に声をかけてやってもらう。本人の持てる力を奪わないことが大切と学んだ。

【事務】

忙しい中だと自分のペースになってしまう。常に相手のペースで行なうようにしたい。

【看護師】

5つのステップの、特に出会いの準備。視界に入り、リハ以外の話をしながら誘導することで、拒否は少なく介入できることが増えたので、今後も意識して行なっていきたい。

【PT】

市民公開講座レポート

みんなで考えませんか？

認知症になっても希望をもって安心して暮らせる街

郡山市医療介護病院主催の市民公開講座が、昨年9月21日(土)に郡山市総合福祉センターにて開催されました。「実際に認知症の介護を経験された方々のお話」として4人の方が登壇し、ファミリテーターを宗形初枝副院長が務めました。その様子を報告します。

9月21日は「世界アルツハイマーデー」。はじめに宗形副院長が、この日に講座が開催される意義や、当院でのユマニチュードの取り組みについて紹介。そのあと登壇者の方々から、実際の介護体験をお話しいただきました。

時間をかけて

寄り添っていくことの大切さ

畠山久夫さんの妻は、現在90歳。4年前に骨折で入院したことをきっかけに認知症がすすみ、今はデイサービスを利用しながら自宅で介護をしています。ス



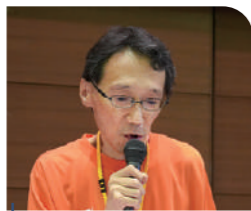
畠山久夫 さま



諏訪一男 さま



佐野静江 さま



芦野正憲 さま



ファミリテーター
宗形初枝 副院長

「自分が元気だったら、お前の首を絞めて、自分も死ぬよ」と言ってしまったそうです。「そのときに妻が涙を流したんです。認知症でも言葉はわかるんだと……。言ったことを今でも後悔しています」と、苦しい胸の内を話してくださいました。

孤立しないで周囲の助けを

5年前に夫を亡くしたという佐野静江さんは、「きれいごと」と言われるかもしれませんが、私が私にとって介護はいい思い出、後悔はありません」と話します。佐野さんの夫は、当初、軽度の認知症と診断されました。けれど「認知症の人と家族の会」

に参加するようになり、「夫は周りの人と症状が違う」と気づいたそうです。最終的に夫はレビー小体型認知症と診断され、家族での介護は難しいと入院。「暴れるなどの症状で拘束もあったのですが、それでも面会に行ったときに破顔になって。その表情が忘れられません」

「認知症の人と家族の会」の郡山地区代表世話人を務める芦野正憲さんは、15年前に母がアルツハイマー型認知症になったことで当会に関わるようになりました。芦野さんは会の紹介に続けて、孤立しないで回りに助けを求めてほしいと呼びかけました。



登壇者の方を囲んで、認知症予防のイメージカラーであるオレンジのTシャツを着たスタッフ